様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月 １１ 日現在

機関番号：３５４１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０４２７０

研究課題名（和文）未刊行資料の解読によるフレーベル保姆養成の思想・制度・カリキュラムとその評価研究

研究課題名（英文）A Study on unpublished Material (Nachlass) and Formation of Froebel's educational Thought on the Plan of the institutional

研究代表者
小笠原　道雄（OGASAWARA, Michio）

広島文化学園大学・学芸学部・教授

研究者番号：１００５３６１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はフレーベルの晩年の教育活動である「保姆養成」の思想・制度・カリキュラムを具体的に現地での調査により明らかにすることと同時に、フレーベル幼稚園の実践家である保育士や学園の関係者の実践報告書を分析して，フレーベル主義幼稚園の実態を解明した。とくに、フレーベル主義幼稚園の実践家のフレーベルに対する具体的で、かつ<生>の「評価」(声)をわが国では初めて考察した。

研究成果の概要（英文）：Subject: A Study on Froebel's unpublished Material (Nachlass) and the Formation of Froebel's educational Thought on the Plan of the institutional Education and curriculum, especially,Froebel's Educational Activitis in his late leif-Period(1840-45) achieved by reading unpublished materials on the institute of kindergarten teacher.

研究分野：教育哲学，教育思想。フレーベル研究。

キーワード：ドイツ教育哲学　ドイツ教育学思想　Fr.フレーベル研究　幼稚園教育　就学前教育

１．研究開始当初の背景

わが国のフレーベル研究は,フレーベルの基本文献の解読とその解釈を中心に行われて来た。基本文献としては,W.ランゲ(W.Lange)編纂の『フリードリヒ・フレーベルの教育学著作集』(Friedrich Froebel's gesammelte paedagogische Schriften)の三巻本を中心に考察されて来た。その邦訳が玉川大学出版部から『フレーベル全集』五巻本として 1977(昭和 52)年から 1981(昭和 56)年にかけて刊行され,多くのフレーベル研究者や実践家が目にする事ができるようになった。確かに本『全集』は,フレーベル研究の基本図書であるが,その反面で,わが国の多くのフレーベル研究者や実践家は本『全集』だけで,フレーベル自身やフレーベルの諸活動が＜わかる＞と考え,誤解するようになった。

論者を中心に,H.ハイラント,K.ノイマン,M.ロックシュタイン女史による日・独の共同研究によれば,本全集の編者である W.ランゲ(Wichrd Lange)の選択によって集録されている本著作集は,フレーベルの論文の約 20%程度で、残りの 80%は,未刊行資料・遺稿として残され,集録されていないのである。

無論,わが国においては,明治 9(1876)年,東京女子師範学校の附属幼稚園が,フレーベル式幼稚園をモデルとして創設され,同年の 1876 年『幼稚園記』(キンダーガルテン)の翻訳(英語版)によってその内容が紹介される。以後 180 余年を経過するが，その間おびただしい数の文献(研究書,翻訳書,学術論文,啓蒙(紹介)論文)等が存在する。

論者は平成 15 年度～16 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))の交付をうけて研究報告書『日本におけるフレーベル文献目録とその解題の作成』として,1)研究書 36 点,2)翻訳書 24 点,3)研究論文(紹介,啓蒙論文を含む)377 点を収集し,若干の解題を施し,平成 17 年 5 月に刊行した。

その研究報告書を刊行以来,筆者は,わが国においては,フレーベルの教育学論集を中心に研究が遂行され,未刊行資料や遺稿によるフレーベル自身の教育活動に対する具体的な研究やその考察が不足し,結果的にその「評価研究」がないことに気付いた。特に，フレーベルの晩年の中心的活動である「保姆養成」に関する実態の把握がほとんどなされておらず,その実態の解明を通じて活動の評価の必要性を痛感し,今回その評価研究に着目し,着手した。

２．研究の目的

フレーベルの晩年の教育活動である保姆養成の思想・制度・カリキュラムの全体的な評価を行う。何故ならば,フレーベルの晩年の教育活動は,1840 年,世界で最初に創設した「幼稚園(Kindergarten)」に関わる子どもの保育に挺身する「保姆養成」にあったからである。保姆養成の端緒は,フレーベルの中期(1831-36)の中核的な教育活動であるスイス・ブルクドルフでの孤児院(初等教育の生徒と就学前の児童を含む)の指導であった。この孤児院での経験を基に,1837 年,フレーベルは母国ドイツ帰還後,フレーベルの幼稚園で利用する教具の考案と共に,児童指導者の養成施設,コースの開設,保姆養成所を矢継ぎ早に開設し,実践する。その社会的背景としては,1840 年代以降,ドイツでは市民層出身の女性たちの自立した社会進出の職業として保姆の道が選ばれたからである。無論,フレーベルの保姆養成の思想の根幹には,家庭と同質の子どもを養育する「場」としての養成施設が思考されていたのである。

本研究ではこれら保姆養成の諸施設に関るフレーベルの思想や制度の特色,諸施設での具体的な教授法やカリキュラムを未刊行資料(遺稿を含む)の解読を通じて体系的に解明し,その全体を評価する。

３．研究の方法

評価研究を行うために,フレーベルの保姆養成機関を具体的に示す。この時期,フレーベルの保姆養成の施設としては,以下の三カ所で開設された。

(1)バート・ブランケ近郊の<児童指導者のための養成施設>①1840 年,バート・ブランケンブルクに保姆養成所<児童指導者コース>を開設②1844-45 年,「カイルハウ保姆養成所」開設。③1848 年,「ルドールシュタット養成施設」を開設。④1849 年,「リーベルシュタイン養成施設」を開設。

(2)1848 年,「ドレスデン保姆養成施設」を開設。

(3)1849-50 年,「ハンブルク幼稚園教員養成コース」を開設。

これらの各施設での具体的な保姆養成のカリキュラムを考察することが重要である。

本研究では,現地のドイツ側(具体的には,バート・ブランケンブルク・フレーベル博物館,ベルリン陶冶史研究図書館(略称：BBF),ベルリン国立古文書館)の協力を得ながら,これらの諸課題を考察した上で,以下の書簡の分析を行い,フレーベルの教育活動に対する具体的な『評価』を行った。

特にフレーベルの教え子・関係者自身による「生の声」を現地での調査と同時に旧東ドイツの代表的フレーベル研究者である H.ケーニヒ編著『私の愛するフレーベル-子供＝と人間の友宛の書簡』(Mein lieber Herr Froebel! ― Brief an den Kinder- und Menschen-Freude ―),Verlag Volk und Wissen,1990)を用いて考察した。なお,本書は東ドイツ崩壊直前の 1990 年に美装丁版として刊行された。同時に邦訳本として 1991 年フレーベル館から,幼稚園創設 150 周年記念出版として『フレーベル賛歌−子どもと人間の友あての女性たちの書簡』(代表訳者岩崎次男)が刊行された。なお,本書の翻訳作業には論者を含む １５名のわが国のフレーベル研究者が参加し,その代表者として岩崎次男

埼玉大学名誉教授が責任者となった。

４．研究成果

研究の目的を達成するためにフレーベルの教え子・関係者の生の声を中心にフレーベルの教育活動を考察した。

この『評価』は,わが国のフレーベル研究では最初の試みとして,日本ペスタロッチ―・フレーベル学会によって「わが国におけるフレーベル研究の大きな成果」と評価された。

国際的な面では,ドイツ・フレーベル学会の会長である K.ノイマン(Neumann,Karl,現ドイツ・ブラウンシュバイク工科大学名誉教授)は,フレーベルの教育活動に対する「世界で最初の試み」として高く評価した。また,ドイツ・バート・ブランケンブルク・フレーベル博物館館長マルギッタ・ロックシュタイン(Margitt Rockstein)女史も「この評価研究によって当時の<フレーベル幼稚園>の活動がより明確になった」と評価している。また,現代フレーベル研究の最高峰と広く認められている H.ハイラント(Helmut Heiland)元国際フレーベル学会副会長,デウイスブルク総合制大学名誉教授も「フレーベル幼稚園の全体的活動とその特徴がよくわかる」研究と評価している。

同時に論者は,このような「評価」研究の手法に関して,学術的な検討として次のような課題が在る点を指摘する。

1.フレーベルの教え子・関係者をどのような「規準」で選択するか。
2.統計学的手法による「評価」方法を加味すべきかいなか。

論者自身は,今回のような「書簡」とか,書かれた遺稿等の資料の解読によるのが適切と考えるが,そこには解読者の主観的判断が入り込む可能性がある点で問題があると考える。従って,以下の諸点を学会等でオープンにして,数値による「評価」方法の利点と問題点をも学会等でさらに検討する必要がある。

従って,これらの点に関しては,今後さらに学会等で広く学術的・実践的検討が必要であると結論する。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）
1 小笠原道雄：F・W・A・フレーベルの教え子・関係者によるフレーベル教育活動の評価−書簡集『フレーベル賛歌−子どもと人間の友あての女性たちの書簡』に焦点化して，『幼年教育研究年報 』,査読有,第 40 巻,2018,1-8.
2 小笠原道雄：未刊行資料の解読によるフレーベルの『ヘルバ・プラン』の研究−ヘルバにおけるフレーベルの教育活動(1827-29)を焦点化して-,査読有,広島文化学園大学学芸学部『紀要』第 8 号,2018,1-10.
3 小笠原道雄：明治期(1868-1912)日本におけるフレーベル主義幼稚園受容の特徴−フレーベル主義幼稚園導入の先駆者を中心として-,査読有,『日本ペスタロッチ―・フレーベル学会紀要』第 29 号,2017,1-16.

〔学会発表〕（計　2 件）
1 Michio Ogasawara,Education for Peace in Kindergarten,The 8th International Froebel Society Conference in Hiroshima,The Japanese Society for the Study of Pestalozzi and Froebel,2018.9.6.広島市民文化センター,広島市。
2 小笠原道雄,フレーベル遺稿の批判的考察,日本ペスタロッチ―・フレーベル学会,2017 年 9 月９日,茨城大学教育学部。

〔図書〕（計　4 件）
1 Michio Ogasawara,”75 Jahr wird kein Gras mehr wachsen”.Ueberlegungen zur Verantwortung von Wissenschaftlen In: L. Wigger/B.Platzer/C.Bunger(Hrsg.) Nach Fukuschima?,-Zur erziehungs-und bildungstheoretishen Reflexion atomarer Katastrophen.Internationale Perspektiven-,Klinkhardt,2017.Ss165-178 .[独文]
2 マルギッタ・ロックシュタイン著小笠原道雄監訳 木内陽一・松村納央子訳,福村出版,『遊びが子どもを育てる―フレーベルの<幼稚園>と<教育遊具』,2014 年,1-99 ページ。
3 エレオノーレ・ヘールバルト編小笠原道雄・野平慎二訳,東信堂,『フレーベルの晩年』,2014 年,1-215 ページ。
4 Michio OGASAWARA”Pädagogik in Japan und in Deutschlande―Historische Beziehungen und aktuelle Probleme−”,[独文] Leipziger Universitätsverlag,2015,1-222.(第二章「日本におけるフレーベル研究」(II. Fröbel-Forschung in Japan)参照のこと)

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
小笠原 道雄（Ogasawara,Michio）
広島文化学園大学・学芸学部・教授
研究者番号：
10053612
(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：　s

(4)研究協力者
(　　)